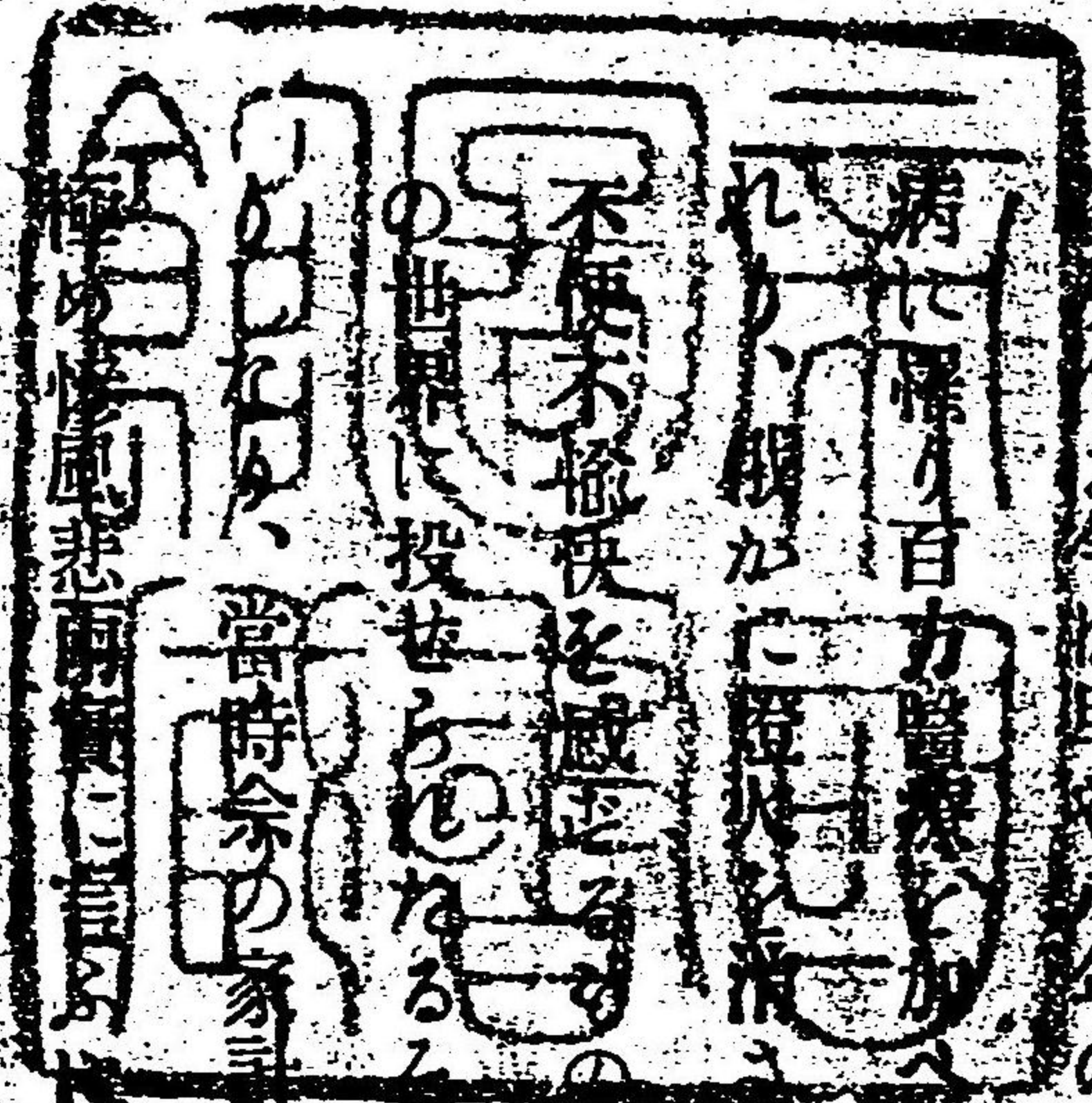


295  
1.0

音心之韻音

29

自序



明交

頃みれば今は早や八年の昔とはなりぬ、即ち余は明治三十一年の春縁内障と謂へる眼病に罹り百方醫治を加へたれども更に其効なく在昔一年有餘の後遂に全くの失明となれり、明かき世界に投せられたるは勝手慣れたる居間の内に於てすら尙ほ且少なからざる不便と愉快を感するものなるに況して余が人生行路の半途に於て俄盲となり突然暗黒の世界に投せられたるの苦惱煩悶は蓋し尋常人の到底想像し及ばざる所のものありたり、當時余の身計は頗る困難なりし上今此不幸なる出来事に遭遇して愈窮迫を極め慟息悲願を言ひ忍びざるの境遇に陥り天を怨み地に歎げ憂憤殆んど一切を絶望し萬事を暴棄去らんとするに至れり、爾來或は肉体上に或は精神上に幾多の艱苦辛慘を嘗め盡せしか漸くにして鍼按の術を學び之に依て僅かに米鹽の料を得つ、辛みして焦眉の急を免る、ことを得たり、而かも衷心の苦悶は未だ容易に脱却すること能はざりき

然るに數年前始めて基督教を聞き豁然として大に悟る處ありしが或る時一宣教師余を

慰めて曰く光は暗黒の裡に於てこそ之を見ること却て明かならんと、此一言は宛ながら天來の大福音の如く余の耳朶に響きたり、是に於てか靈的の光明皎として我胸奥を照らし新たに人生の趣味を感得し心氣爽然頓に活氣を生ずるに至れり、然るに纏つて世間幾多の同病者が均しく悲慘の難境に呻吟しつゝ、あるを思へば同情の念勃して禁ぜざる能はざるに自家の不幸に泣きし心は今や變じて他の薄命を悲しむの情となり献身以て同胞盲人の爲めに盡す處あらんと欲し竊かに之が研究に従事すること茲に年ありき

近頃漸く我盲人教育に關する管見を懷き亦聊か計畫をも定むるに至りたれば之を公にして天下の志士仁人に訴へんが爲め試みに點字を以て稿を起し家人に口授して之を代筆せしめ此小冊を成すに至れり、余や不學短才固より文事に閑はず敢て大方の瀏覽に供するに足らざる雖も幸に諸君に一讀を煩はし我盲人教育に對して諸君の注意と同情を喚起することを得且余の卑見計畫に就て惜みなく叱正教示を賜はらば余の光榮何ものか之に如かん

明治三十八年三月

著者識

目次

第一章	盲人の境遇	一頁
第二章	社會事業としての盲人教育	三頁
第三章	日本の盲人教育	五頁
第四章	盲人教育の價值	七頁
第五章	點字智識の普及	十頁
第六章	點字の自宅獨習	十二頁
第七章	點字書籍の出版	十五頁
第八章	結論	十六頁

盲人之教育

盲人左近允孝之進著

第一章 盲人の境遇

荷も心あるもの誰が不幸なる盲人の境遇を憫まざるものあらんや、況んや余の如く身自ら盲目の苦痛を経験しつゝ、あるものに於てれや、余が身の淺學無能を顧みず敢て卑見を開陳して天下の志士仁人に訴ふる處あらんと欲する所以のもの蓋し同病相憐むの至情軒々禁する能はざるものあればなり、

試に思へ、両眼明を失して一たび暗黒の裡に其生涯を葬られたる盲人は春花秋月の樂なきなり、珠玉錦繡の美を知らざるなり、明媚なる山水も宏壯なる樓閣も亦以て彼等を歡ばしむるに足らず、看よ煌々たる電燈の下猶ほ一條の杖に依り縋りて戦々競々闊路をたどりつつ彼等の彷徨ひ行くを、噫彼等は實に二十世紀の聖代に生れ來て而かも文明の恩澤に浴すること能はざる天下の最大不幸兒にあらずや、

豈唯それのみならんや、世間一般の冷淡なる人情は常に彼等を擯斥して社會の外に追放し去らんとするもの如く家庭は之に教育を施さず社會は之に對等の權利を認めず、凡ての点に於て彼等は殆んど人間視せられざるが如き有様なり、自然界との絶縁は猶ほ忍ぶべし、單に肉眼の明なき爲め人間社會の追放者となるに至つては到底忍ぶべからず、嗚呼斯る悲惨の境遇に陥れる盲人の煩悶苦惱誰かよく之を察すものぞ、余嘗て一盲人と語り其慘愴たる心事を聽きて借に同情の涙に咽びたることあり彼は自己の經歷を語りて曰く我は三歳の時不幸にして盲目となり七歳にして慈母に別れ十三歳又父を失ふ、而かも親戚故舊の寄るべきなく爾來僅かに一條の杖を力に旅稼の按摩となり霜夜炎天の厭ひなく到る處街頭憐れを笛に吹き鳴らしつつ漸く露命を維ぐもの茲に二十有余年今又齡既に四十を越ゆるも未だ住むに家なく頼るに妻子なく飄泊浪々遂に一日の安さを得ず、されば人生の趣味なるものは我に於て全く之を解する能はざるところ、今にして之を思へば既往幾十年の久しき何を樂しみに生き何を望みに過ごしけん、食ふては寝ね起ては亦食ふ、唯之れ憾軻落魄無意味の半生を送りしのみ、感

慨一たび茲に至れば自ら禁せんと欲するも得べからず、寧ろ三歳失明の當時父母手づから我を刺し殺して疾く此世を去らしめ給ひしこそ却て深き慈愛にてはあらざりしか愁ひに用なき命長らへて此の憂き目を見るこそ恨みなれど、嗚呼これ何たる悲愴の述懐ぞや、彼は實に其生れし日を詛ひつゝありしなり、苟も人情を解するもの此物語を聞きて誰か一掬の涙なからんや、然れども斯の如き憐れなる心情は獨り此の一人のみに止まらず現在全國七萬の盲人等は彼と等しく暗黒の裡に憂愁の日を送り血涙の夜を明かしつゝ、ありと知らずや

## 第二章 社會事業としての盲人教育

抑も社會の改善とは人類間の不平均を除くにあり不平等を取去るにあり、即ち不幸なるものをして成る可く多く幸福に進み苦痛を感ずるものをして成るべく多く安慰を得せしめんと計るにあるなり、彼の貧民救助と云ひ孤兒養育といひ必竟彼等可憐の不幸者に他の幸福を分配して之を平均せしめんとするものに外ならず、されば前述の如き盲人の不幸を救ひ其苦痛を輕からしめ其涙を減少せしむることも亦これ實に緊要なる

社會事業の一として確かに志士仁人の顧慮を煩はすに足るものにあらずや、蓋し盲人を救済するは常に彼等自身の爲めのみにあらず社會全体の改善上より視るも亦決して等閑に附すべからず、假令ば茲に一家の内に盲目の子弟ありて日夜陰鬱憂愁に沈み常に坐隅に蟄居呻吟しつゝ、ありと假定せよ、其家庭の空氣暗澹として自ら不愉快ならざらんと欲するも豈夫れ得べけんや、一國一社會に於けるも又然り、由來盲人の涙は社會に存する一の不快分子として文明の天地を汚濁しつゝ、あるものなり

却説盲人教育は即ち彼等の苦痛を醫する最上手段にして盲人保護救済の道之を措いて他に求むべからず、蓋し盲人は其身体に於ては既に回復すべからざる一大欠点を有し著婆扁鵲も到底匙を投せざるを得ず、故に肉体上の安慰満足は之を望むも遂に得べからざるなり然りと雖も吾人万物の靈長たる人間はたゞひ肉体上に於て安慰を得る能はざるも猶ほ心靈上に於ては一層高等なる精神的快樂を玩味するの特權を有す、是故に盲人は一方に於て満足なる快樂を受くる望みなき代りに他方に於ては充分之を補ひ得るものなることを知らざるべからず、即ち教育の力によつて其心眼を開き精神的に人

生の趣味を解することを得せしめなば以て其苦痛煩悶を除き憂鬱無聊を慰め胸中別に光明の新天地を開拓して優に幸福なる生涯を送るを得ん、フランス、ポーランド會て論じて曰く慈善は教育にありと、我盲人の救済に於て殊に然りと云ふべし、

### 第三章

#### 日本の盲人教育

輓近歐米に於ける盲人教育の進歩は頗る顯著なるものにして小學若しくは中學程度の盲人學校に至る處に設けられ盲人の多數は此處に學びて普通の教育を受け或は進んで大學校に入り専門の學科を脩得するものも亦少なからず、其結果として學術に精通し實業に成功する盲人等續々輩出せり、現に彼の國には盲人の博士あり學士あり教師教師あり新聞記者著述家あり、何れも其智能の發達上往々常人に勝ることあるも決して劣る處あるを見ず、それ確かに二十世紀の世界に於て一光綫を放てるものと云ふべきなり、

然るに我國に於ては最近の調査に依れば全國七万の盲人中學齡にあるもの實に四千人を越ゆ、而かして之に對する教育機關としては僅かに東京盲啞學校京都及び大阪盲啞

院其他十數個の地方訓盲院あるのみ、而かも其生徒の數は東京に於てさへ漸く百名に充たす、況んや他の訓盲院の如きに至つては一校三十名の生徒を有するもの殆んど稀なり、故に今日我國の學齡盲兒百名中僅かに十名の就學者ありて他は悉く不就學者たる割合なり、

嗚呼此可憐なる三千余の不幸兒は到底文明の恩澤に浴することを得ざるか、余は思ふてこゝに至れば眞に彼等不幸兒の薄命を憫むと共に衷心我帝國文明の瑕瑾を慨歎せずんばあらざるなり、

今夫れ北風肌を劈さくの夕雷聲斷續街頭に彷徨ふ盲人を見又は三筋の糸に貧苦を歌ひ十三絃の面に行路難を語る瞽女を思ふ時に彼等は決して明治聖代の惠に浴するものとは言はれざるなり、もし彼等を去て幸に普通教育の力をだに有せしめなば必ず、やより高尚なる事業をなし、より幸福なる生活を樂しみ得たるをらん、且其中の少くも才能あるものを撰抜して試みに高等教育を受けしめなば如何なる英才偉人を出すやも又將さに預じめ知るべからざらんぞとす、然るに東洋の先進國を以て自任し仁義を以て立

てりと稱する大日本帝國に於て未だ盲人教育の普及せざること斯の如くなるは寧ろ不思議の現象と言はざるべからず、此に於てか余輩は大に絶叫して大方仁人諸君の賢慮を煩はすの已むを得ざるを感ずるなり、

#### 第四章 盲人教育の價值

由來我國に於ても盲人に對する社會の同情必すしも冷淡なるにあらざると雖も之が教育に就ては未だ充分其價值を知らざるもの多し、されば盲人を以て到底尋常其能力なきものとなし之に學術を教ゆるが如きは全然無効無益の沙汰と考へ、さては卑近なる音曲若しくは鍼接術の類を習はしめて僅かに糊口の道を立つるを得せしむれば以て足れりとなす、嗚呼これ盲人を蔑視して普通の心意精神を有せしむるもの謬見も亦甚しからずや、既に前章に陳べたる如く盲人の教育は文明社會の緊要事件にして其價值は實際盲人教育の成績に鑑み又は古今東西の實例に徴して明白に了知することを得るなり聞説米國にヘレン、ケラ嬢となん呼べる一女子あり、生れながらの盲目にして而かも聾啞なりと然るに篤志なる一教育家は此の奇態なる不具者に就て教育の成績を試み

んと欲し非常の熱心を以て教導訓育の結果彼女をして普通教育より進んで更に高等の教育を受くるに至らしめ遂にラッドクリフ大學校の文學科を卒業して天晴れなる學者となり今日現に著述家をして大に名聲を博しつゝ、ありと云ふ、五官の内其四官の働を失し僅かに皮膚の一知覺をのみ有する此不具者にして猶ほ且然り、況んや普通の盲人は彼女に比すれば其不具の程度遙かに軽く即ち單に其視覺の一を欠くに過ぎざるものなれば、もし熱心懇切之が教育に力を用ゐなば其効果豈彼の一女子に譲らんや、我國に於ては塙保巳一杉山和一後藤松軒等の如き又輒近英國の偉人カムメル博士の如き何れも盲人ながら各希有の器量を備へ非凡の識見を有し明者をして其後に瞠若たらしむるものあり、嗚呼彼等は實に世人をして盲人を重んじ之が教育の價値を知らしむる爲めの好材料にあらずして何ぞや、

今仮りに一步を譲り盲人を目して必身不具の廢物と見做すも尙之を教育するの價値は充分に存するなり、夫れ廢物利用は天下の大經濟にあらずや、掃溜めに捨られたる鐵れ草鞋と雖も之を繕ひ用ゆれば猶ほよく半日の用に供するに足る、況んや人間の廢物

豈に之が利用の途なからんや、もし教育の力を借りて從來無用無益の廢人不具者として見捨てられたる盲人を括かし各一人前の働をなさしむるを得ば國家の利益蓋し鮮少にあらずらん、思ふに我國七方の盲人中眞によく獨立自營の民たるもの極めて少數にして多くは父兄親戚等の扶助を受け兜兜知已の憐みを乞ふて漸く露命を維ぐに過ぎず斯くの如くんば之れ實に社會の厄介物にして不經濟も亦甚しと云はざるべからず、曾て英國一盲人教育家言へることあり盲人を教育する爲めに費す處の經費は之を教育せざるが爲めに將來社會の經濟上に及びす損失に較ぶれば甚だ廉價なるものなりと、蓋し謬言にあらずるなり、

加之盲人は世間に於てこそ最下級の地位に置かれ其勢力皆無なりと雖も彼等も亦家庭を組織し子女を教育することあるものなればよく一家の風儀を維持し子女を薰陶するに足るべき資格なかるべからず、此時に當りもし彼等をして無教育無智識ならしめば到底其本分を盡すこと能はざるや必せり、されば社會が盲人より家庭を形造る權利を褫奪し去ざる限りは彼等に教育を授けて國家の良民となし社會有用の人物たらしむべ



きにあらざるや、

之を要するに盲人教育の結果は實に盲人其人の一身上に止らず延いては廣く國家社會に至大の影響を及ぼすべきものなれば盲人教育の價值と其必要とは敢て常人と異なることなしと謂ふべきなり、世の經世家教育家諸君幸に我盲人教育の現状を査察し其方法を研究して之が發達普及に力を致されなば實に盲人社會の幸福なるのみならず亦實に國家の利益たるなり、

#### 第五 章

#### 點字智識の普及

抑も點字は盲人の用ゆる唯一の文字にして實に彼等が心の杖とも稱すべきものなり、彼等の手に持つ杖が身体の運動に必要な如く其心的活動の爲めに心の杖たる點字の必要欠くべからざることは言を俟たず、彼の盲目にして河を渉り山を越へてよく百里の遠路をも旅行し得る、以所のものは誠に一條の杖を頼ればなり、若し夫れ心の杖をたに有せば暗黒の裡尙よく人生の行路を安らかに渡り更に進んで或は廣く智識の世界に逍遙し或は高く心靈の天地に出入することを得ん、

近來歐米に於ける盲人教育の進歩は全く此點字の力に依るものなり、即ち從來癡人不足者として見捨てられたる盲人が今や其智能を啓發せられて有爲の人材となり幸福なる生涯を送り得る以所のものは實に點字智識の恩惠なりと言ふべし、點字の効果も亦著大なるものにあらざるや、

然るに我國に於ては盲人にして今日尙ほ點字を學ぶもの甚だ少なく隨つて其教育の狀況も之を歐米に比較すれば彼我雲泥の差あるを免れず憐むべし我國の盲人や、適々明治の聖代に生れて既に點字の行はる、に係らず尙之を學ぶことを知らず身心共に盲目にして少しも文明の恩澤に浴すること能はず、心の杖のなき儘に右に墮き左に迷ひ不便不幸の中に空しく其一生を送るもの滔々皆な之れなり、嗚呼如何にして彼等を救済し其心眼を開かせむべきか、唯夫れ彼等を教育するにあり彼等に點字の智識を與ふるにあり、豈他あらんや、

蓋し盲人教育の第一着歩として點字を學ばしむることの必要なるは苟も盲人教育に經驗あるもの、皆均しく認むる處なり、故に今日點字智識の普及を計るは我盲人教育事

業に於ける最大急務なりとす、然るに甚しきは盲人又は其父兄等にして未だ點字の行はる、ことをだに知らざるものあり、よし又之を知るも點字を學習するは容易の業にあらざりと思惟し更に顧みざる有様なり、然れども點字の學習は而かく困難なることにあらざり、少しく志あらば學校教育以外自宅獨習の方法によりて充分習得し得べきことは余の信じて疑はざる處なり、余は此方法により廣く盲人社會に點字の智識を普及せしめんことを欲し聊か其草案計畫を懐くものなり、乞ふ次章に於て之を述べん、

## 第六章

### 點字の自宅獨習

點字は讀んを字の如く厚さ紙面に凸隆せる粟粒の如き小點の位置と數との異なるに従ひ一字一音を顯はしたるものにて指頭の知覺を以て之を探り讀むものなり而して其字數は仮名五十音と若干の符號とを合せて僅かに六十字内外に過ぎず、故に其六十個計りの點字をさへ記憶すれば如何なる文章と雖も容易に讀み得るに至る次第なり、之を通常墨字の字劃錯綜して而かも其數の幾方なるに比すれば其記憶し易きこと果して如何計りや、

殊に盲人は視覺を欠く代りに觸覺の發達頗る著しきものにして其知覺の鋭敏なること常人の想像以外にあり、且其記憶力も自ら尋常にあらざることは凡ての人の知る處なり、今此強き記憶力と鋭敏なる觸覺とを以て極めて單純にして少數なる點字を學ぶことの取て困難ならざるは毫も疑を容れず、故に少しく點字學習の要領を解しなば何人にて之を盲人に教授することを得べく將た業人其人にして熱心勉勵せば自宅にありてよく之に通曉熟達し得んことを余の堅く保証する處なり、

余は以上の理由と確信により別に盲人點字獨習書一名點字教授法と題する書籍を著し以て其成績を試みんと欲す、此書は點字の讀み方及び書き方を尋常の墨字を以て説明したるものなるが故に盲人は最初其父兄又は友人に就て之が代讀講解を求むるを要す、而して暫くは忍耐を以て熱心練字せば其月ならせして悉く點字を記憶し了り直に進んで點字の書物を讀み或は之を以て自由に我思想を文章に顯はし得るに至らん、されば此方法により學齡の盲兒をして其家庭に在りて普通の學科を脩めしむること若しくは又點字教科書を携へて小學校通ひ一般の生徒と共に教授を受けしむることも強ち

困難の業にあらざるべし、

思ふに現今盲啞學校若しくは訓盲院を擴張増設して専門的に正式の教育を盲兒に施すことの必要なるは勿論なりと雖も如何にせん今日は未だ其場合に達せざ、よし是等の學校多く設立せらるゝも盲人及び其父兄等が點字によりて教育を受け得ることを知らぬ殊に其父兄等に於て不具なる盲兒を愛するの餘り之を家庭の外に送るを好まざるが如き事情あり若しくは其家の貧困なるが圓め學資の支辨に堪へざる等の理由によりて恐らく盲兒の入校就學するもの割合に少數ならんとの想像は蓋し當らずと雖も遠からざるべし、是を以て余は先づ此自宅獨習の方法によりて學校教育の先驅をなし且は目下の欠を補は、我盲人教育の進歩發達上裨益する處決して尠ならずと信するなり、加之此自宅獨習法によれば其父兄友人たるものも盲兒を教ゆる間に自ら點字の智識を得るに至るべければ因て以て相互の意思を疏通し明暗の了解を助ぐる便益あり、其結果は大に家庭の和樂を増し社會の幸福をも進ましむること、ならん、斯くてこそ點字の効用も初めて全く之が自宅獨習の利益と興味亦大なりと云ふべけれ

#### 第七章 點字書籍の出版

凡そ出版事業なるものは人智の開發文明の進歩上に大關係を有するものなり、我國が最近三十余年間に於て長足の進歩をなせし以所ものは蓋し著譯書及び新聞雜誌等の出版物により盛んに世界の新智識を國民の間に普及せしめたるに職由せずんばならず、然るに今日まで我盲人教育の微々として振はざると既に教育を受けたるものに於ても其智識の發達上更に見るべきものなかりしは想ふに其源因一に點字出版物の欠乏にあるならんか、勿論從來と雖も點字書籍の發行せられしものなきにあらずと雖も其種類の少なきと價格の廉ならざるが爲めに廣く一般の盲人社會に行き渡らず、盲人講學の不便實に言ふに堪へざるものあるなり、

是を以て余は前述の如く點字の自宅獨習書を著はし點字智識の普及を計ると共に盲人用の教科書其他有益なる點字書籍の出版を盛んにし以て暗黒なる盲人の世界に文明の光明を照り輝やかさしめんことを熱望して止まざ、之が爲め余は年來工夫を凝らし近頃漸く便利なる新式の點字活版機械を發明せ得れば今や之を以て小學校程度の教科

書を初め各種の書籍を印刷し廉價を以て之を盲人間に頒布せしめんものし計畫し、  
 あり、此事幸に成功せば我盲人教育事業の爲め聊か貢献する處あらん、  
 備へ聞く英國龍敦の内外盲人協會に於ては殆んど百名近かり職工を使役し曠へず點字  
 書の出版に従事しつゝありと、豈亦盛んならざるや、俄かに企及し得べからざるも  
 努めて倦まざれば我盲人教育の發達に連れて斯の如き隆運を他日我國に現出せんこと  
 必しも望み難きことにあらざるべし

### 第八章 結 論

以上論ずる如く盲人と雖も尙ほ人間の一人にして亦社會の一員たれば一般の明者と均  
 しく之に相當の教育を授け其智能を啓發し徳器を成就せしむることは確かに社會の義  
 務責任たるなり、唯その失明せるが爲めに之が教育の方法聊か面倒なるが如くに思惟  
 せらるれば亦尙來盲人は墮者と異なり智能の發達上最も必要なる言語を聽くこと及び  
 之を語ることを能く何等の不自由あるなく而して鋭敏なる觸覺は視覺の欠を補ひ點字  
 によりて讀書文作をなすこと極めて容易なれば少しく其道に熟練せば教ゆるも學ぶも

明者に於けると其勞格別の相違なきに至らん、要する處は盲人の父兄及び教育者諸君  
 の同情と盡力にあり、諸君にして進んで彼等の爲めに一臂の勞を貸し常に啓導を怠ら  
 ずんば余の所謂自宅獨習の方法によりてさへも尙ほよく普通學を脩得し得られんなり  
 余思ふに點字の自宅獨習は昔に目下一時の應急的方法として甚だ適切なるのみならず  
 亦實に學校の専門的教育以外特種の便利と利益あるものなるを以て學校教育と共に我  
 盲人教育の一大良法として永久に實行すべき價值あるべし、故に余は我同胞盲人の講  
 學に資せんが爲め特に著はしたる點字自宅獨習書と續々出版すべき點字教科書等によ  
 り全國の學齡盲兒其他の盲人諸君が奮發勵精して大に勉學に志し且其父兄及び友人諸  
 君に於ても深き同情と親切とを以て斷へず傍より獎勵助力を與へ希くは盲人教育の普  
 及をして一日も速かならしめんことを祈るなり、

若し夫れ盲人の學校教育に至つては殆ねく天下の經世家教育家慈善家等の盡力により  
 更に擴張完備せしむるの必要あり、余自身に於ても亦聊か企圖を懷抱し居れば遠から  
 ず之を發表して諸君の贊助助力を仰がんと欲す、希くは大志の志士仁人諸君余が一片

8/5/41

朕々の赤誠を証とし人道の爲め我盲人教育に對して多大の同情と助力を興ふるを惜ひ  
こと勿れ

附 錄

日本全國盲啞學校一覽表

校 名	所 屬 位 置	歳 費	生徒數	補助金	校 長	創 立 者
京都市盲啞院	京都上京區 釜坐堀水町	七、〇〇六 <small>圓</small>	盲 七三 啞 一五八	府 二、三〇〇 <small>圓</small> 市 二、九五〇	鳥居嘉三郎	古川太四郎
東京盲啞學校	東京小石川 指ヶ谷町	一五、四二七	盲 一七三 啞 一九七	國 二、四一二	小西信八	樂善會
高田訓盲學校	新潟縣高田町	二五〇	盲 九	二〇〇	杉本直形	大森隆碩 杉本直形
橫濱基督教訓盲院	橫濱中村	五九五	盲 二〇		米國夫人 ドレイバル	ギデオ ン ドレイバル
岐阜訓盲院	岐阜 東都賀佐町	一、〇〇〇	盲 二二		森卷耳	岐阜聖公會
函館訓盲院	函館青柳町	四五〇	盲 一六		フロレンス シンガー	マイライ チ ドレイバル
福嶋訓盲學校	福嶋縣福嶋	三二〇	盲 二二		宇田三郎	澁木重庵 長澤正太郎
東海訓盲院	掛川町	九九一	盲 九	郡 二〇〇 縣 〇〇	鈴木康平	東海慈善會
長崎訓盲學校	長崎興善町	二、六三四	盲 四四 啞 四五	市 八七八	荒木周道	長崎慈善會
豐橋盲啞學校	豐橋町	八五〇	盲 二二 啞 三三	郡 二〇〇 縣 〇〇	成瀬消	成瀬文吾
長野盲人學校	長野縣長野	三五二	盲 二五	市 二〇〇 縣 〇〇	渡邊敏	花田初太郎
鹿兒嶋盲啞學校	鹿兒嶋長田町	七二〇	盲 三五 啞 四		佐土原スエ	佐土原スエ
大阪盲啞院	大阪南區鹽町	三、八〇〇	盲 一〇 啞 三三	市 五〇〇	古川太四郎	五代五兵衛
臺南慈惠院	臺南	一、四〇〇	盲 一〇		秋山甫三	臺南聽
名古屋盲學校	名古屋 南伏見町	八二〇	盲 二二 啞 三六	縣 一〇〇	長岡重孝	長岡重孝
啞 生 部	宮城縣 師範學校 附屬小學校內		啞 九		新莊義之	宮城縣 師範學校
啞 生 部	長野縣尋常 小學校付設	一八〇	啞 一二		渡邊敏	關山國雄

備 考

學科は盲生に普通學級按音典等を教授し啞生には普通學  
圖畫彫刻裁縫等教授するもの多し修業年限は三年より五  
年までの間に在り

明治三十六年末の調査

395  
10

明治三十八年三月廿二日 印刷  
明治三十八年三月三十日 發行

〔定價金五錢〕

著者兼發行者  
左近允孝之進

兵庫縣神戸市大開通三丁目二十八番屋敷

印刷者  
全縣全市塚本通二丁目二十三番屋敷ノ一  
中村徳造

# ● 廣 告

一 盲人點字獨習書 一名點字教授法

附

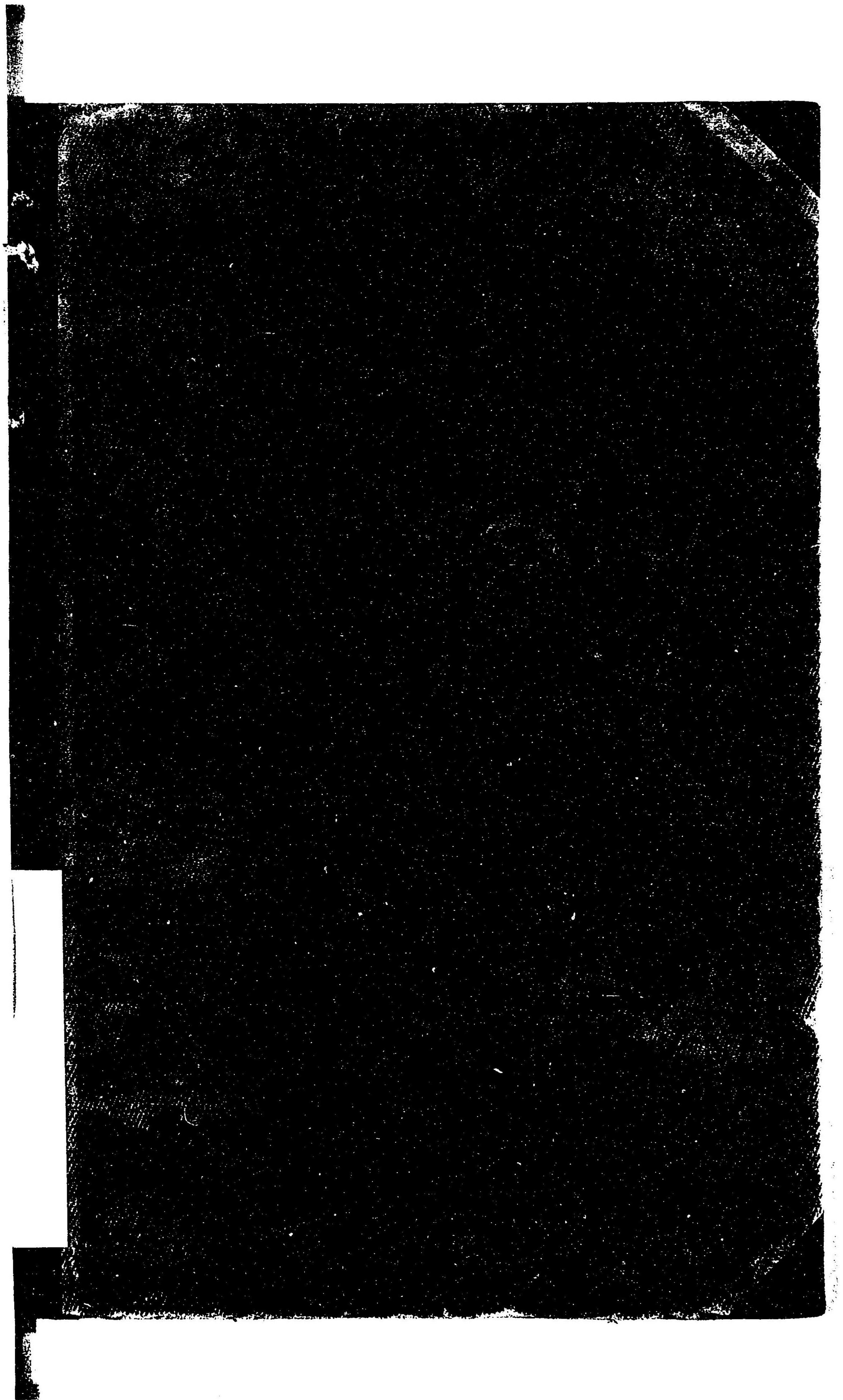
一點字尋常小學教科書

一部代價金三十拾錢

一 此書は初學の人に解し易く習ひ易き様簡單に點字の讀方書方を指南するものにして一名點字教授法と名づけ尋常墨字を以て之を記述し附するに點字を以て書したる尋常小學教科書を以てせり故に點字を學ばんとする盲人諸君は自宅に在つて其父兄若しくは知己に請ふて此書の講讀説明を求め點字教科書に依りて研究せば容易に點字を學ぶ事を得べし



295
10



295  
10

盲人之教育  
完

048462-000-0

295-10

盲人之教育

左近允孝之進 / 著

M38

BEH-0022

